

〔書評〕

阿部潔

『シニカルな祭典…東京2020オリンピックが映す現代日本』

…新しい戦前／中の祭典―東京オリンピックを捉え返す―

野上 玲子 (江戸川大学)

1. 本書の目的

本書を手にとった瞬間、グレーの不気味な表紙に息を呑んだ。著者の静かな怒りが赤字で示されていると同時に、その赤字は微かな希望を示す太陽にも思えた。偶然にも、と言っではおこがましいが、評者である私も著者と同様の問題意識を持っているため、未だモヤモヤが取れない東京2020オリンピックに対する葛藤を少しでも晴らしてほしいという期待を込めて読み進めた。

二〇二一年八月八日に東京2020オリンピックの閉会式が執り行われ、二年が経った。この二年間で報じられたオリンピック関連の報道と言えば、賄賂事件に尽きる。著者が

「あとがき」で述べているように、世論の反応は、残念な不正を目の当たりにしても、「やつぱりね」「またかよ」という無関心の延長であった。コロナ禍により一年延期となった東京2020オリンピックの開催を通じて映し出された日本の社会とは、果たしてどのような姿なのだろうか。さらに、「わたしたち」はどのような揺さぶりをかけられ、オリンピックのどこに希望を見出すことができるのか。本書は、これらの疑問点を社会的な分析を踏まえて考察されている。

2. 本書の内容

本書の内容から、キーワードを一部取り上げてみると、東

京2020オリンピック、(「わたしたち」、メガイベント、メディア、開閉会式パフォーマンス、パラレルワールド、「憑き物」、「もやもや感」、ユートピア、シニズム、となる。このキーワードの中から評者が特に気になった内容を述べてみたい。

2-1. 開閉会式パフォーマンス(第2章)

オリンピックの式典は、IOC(国際オリンピック委員会)会長をはじめ、天皇陛下、各国の主賓が参加し、最も華やかな場所となる。同時に、テロの格好の場ともなり得るため、厳重な警備体制が敷かれる。そのような桁違いの式典が一連の騒動を経て執り行われ、著者はその演出について、以下のように論じている。

- 1) 理念なき祝祭という東京2020オリンピックの実像。
- 2) いまだに若い／女性のクリエイターが実力を発揮できない日本の男性中心社会の現実。
- 3) 久しくグローバル化が叫ばれながら依然として確たる自己像を世界に向けて発信できていないJ・A・P・A・Nの窮状。(五八頁、傍点は評者)

開会式では、理念なき祝祭、日本の男性中心社会、J・A・P・A・Nの窮状、が無情にも浮かび上がったとされる。とはい

え、著者は決して開会式の演出を完全に否定していたわけではない。黙祷や舞踏を通じて、「死者の表象」、死者による「生者の召喚」という演出の可能性が微かに感じられたとすれば、グローバルな文化表象としての式典の意味はあったと述べている(五九―六一頁)。長丁場に渡る開会式の中で、黙祷の瞬間だけは、多くの人の死を尊い、「祈り」にこそ平和への願いが表出される。いま／ここに生きる多くの人が、この黙祷の瞬間を、「死者への追悼」の意を込めたであろう。しかし、著者は、死者による「生者の召喚」と捉え、そこには未来に向けてそのとき／あそこで生まれる者たちへと希望を託す瞬間だと考察している。身体を躍動させて競う祝祭の場で、生／死を意識し、死者から未来への希望を想像する。これは非常に興味深い論点である。

2-2. 落ちた「憑き物」(第4章)

著者は、東京2020オリンピックは(「わたしたち」として「憑き物」のような存在だったと表現している。榮しみと不安による「もやもやした気分」に取り憑かれ、独特な感覚で向き合い、祝祭が終われば己からすっかり消えていく。確かに、評者も何か目に見えない異様なものに取り憑かれ、色んな感情が交錯しながら研究しているようにも感じる。もはやトップアスリートの中にも、何か特別な「憑き物」に何年も取り憑かれている選手がいるのではないだろう

か。東京2020組織委員会会長を担った橋本聖子氏は、二〇三〇年札幌冬季大会の組織委員会会長に推薦された場合に「ぜひ引き受けたい」と述べ、これに対し、著者は「もうすでにしっかりと次なる魔物に取り憑かれていくようだ」（九五頁）と伝えている。この取り憑かれた感覚は決してコロナ禍の東京大会に限ったものではなく、「憑き物持ちの家と『縁を結ぶとその家も憑き物持ちになる』」、「『憑き物持ちの家はどこでも金持ち』（九四頁）だからこそ、オリンピックというグローバルな「金持ち」にはなかなか免れられないのが現実のようだ。著者は最後に、どうせ取り憑かれるならば、嘘くさい建前と銭金の分かりやすい魔物ではなく、底知れぬ畏怖を禁じ得ない禍々しい魑魅魍魎（ちみもうりょう）にでも取り憑かれない（九六頁、一部要約）と述べている。魑魅魍魎とは、山川の精霊、化け物を示す。どうせ嘘と金にまみれた魔物に取り憑かれるのであれば、底知れぬ恐怖に満ちた化け物に取り憑かれた方がまだ、という著者の主張は、確信を捉えつつも、シニカルさとユーモアさが存分に発揮されたコメントである。

2-3. シニシズムから脱するために（終章）

著者は本書の最後に哲学的な考察を行っている。それは、ペンヤミンやイーグルトンの思想をもとに、オリンピックは「『もとに戻せない』という一回性や刹那の価値を持った大

会である」という考察である。この著者の考察が、実のところ私にとって絶妙に腑に落ちる内容であった。スポーツの魅力というのは、そもそも一回きりの勝負、賭け、気晴らし、という点にある。しかし、オリンピックが「もとに戻せない一回性」だけの魅力であれば、それはワールドカップのような国際スポーツ競技会となら変わりのない大会となる。この「もとに戻せない」という意味には、前述の開会式の演出のように、死／死者を意識する視点が込められ、「『死という最終性』の視点から、スポーツを眺めるという想像力」（一六七頁）の重要性が説かれている。この考え方は、平和の祝祭に不可欠な思想であり、希望であり、オリンピック研究を後押しする有意義なものであると考えられる。

3. シニカルな祭典の正体

「東京2020オリンピックとはなんだったのか？」という著者の起点となる問題提起では、攻める／かわすシニシズムの奇妙な絡み合いが浮き彫りとなり、それは、日本社会の構造とそこに生きる（わたしたち）の姿でもある、と分析されている。

個人的な感想となるが、本書をじっくり読んでいくと、前述の橋本氏ではないが、「攻める／かわすシニシズム」を絶妙にコントロールし、シニカルさを創出していたのは、組織委員会だったのではないかと感じた。組織委員会のメンバー

は、バッハ会長をはじめIOCのやり方に矛盾や憤りを感じながらも、開催に向けて攻め続け、〈わたしたち〉の意見や関係者の内なる感情（本音）をもかわし続けてきた。組織委員会の解散は「憑き物」が一気に剥がれ落ちた瞬間であり、〈わたしたち〉の前から報告書だけを残して消えていった。

「攻める／かわすシニシズム」の両端を担っていた組織委員会は、もともとシニカルな祭典を創出し、日本社会に生きる〈わたしたち〉を映し出した魔物だったのではないだろうか。

本書を通じて、平和の祝祭の意味、生／死、そして〈わたしたち〉の存在意義について模索する機会を得た。今後、戦中の最中でパリ五輪を控え、札幌冬季五輪の招致活動も見送られ、二〇二五年には大阪・関西万博も控える日本で、不都合な現実に向き合う本書の体系的な議論は、今必読すべき一冊であると言える。

〈付記〉

本稿は、二〇二三年八月八日、早稲田大学で開催されたカルチュラル・スタディーズ学会研究企画委員会主催の「阿部潔著『シニカルな祭典…東京2020オリンピックが映す現代日本』（晃洋書房）刊行記念イベント『新しい戦前／中の祭典—東京オリンピックを捉え返す—』」における報告の一部を加筆・成稿したものである。